

## 年間第四主日

第一朗読 申命記 18・15-20

第二朗読 一コリント 7・32-35

福音朗読 マルコ 1・21-28

2021.1.31 高円寺教会 9:30 ミサ

サレジオ会 関谷 義樹神父

今日の朗読は、神様の言葉、預言がキーワードで、その言葉をどう聞くか、どう聞き従うかというところに焦点が置かれていると思います。第二朗読の聖パウロも神様の言葉を預かった者として、信徒に勧めているという構造になっています。今日は、神の言葉に照らし合わせて、わたしたち自身の言葉がどうなっているのかということも振り返るチャンスにしたいと思います。

これまでに、「オマエにそう言われたくないよ」と言われたことはありませんか？ 何か会話の中で、相手から嫌味っぽく言われた、ということもあるかもしれません。けれども、そう言われたら確かに辛いですね。自分ではなくて他の人だったら聞き入れるかも、ということが裏返しにあるわけです。つまり、言葉の内容の奥に、人は私の背景にある人格を見ているという部分があるわけです。

「オマエは言っていることと、やっていることがまったく違う。そんなオマエの言うことなんか聞かないよ」ということ。

わたしたちは言葉を耳にするとき、使うとき、その人の発する言葉の背後に、その人のいわば人格を見るわけなのです。ですから、言葉と人格が一致していることを期待しているということなのです。日本のことわざの中に「武士は一言」という言葉があります。言ったことは実行する、という意味での武士の姿を表わし、また理想として語っているわけです。あるいは、裏切を牽制するにあたって、「嘘つきは泥棒の始まり」といった言い方をして、盗むという行為を牽制するという言葉もあるわけです。嘘というものは泥棒につながっていくんだぞっていうようなことですね。つまり、わたしたちは、言葉というものは、その人の生き方、あるいは行動や態度に表れるその奥にある人格と結びつけて考えているし、期待しているのです。そして、人格が言葉に表れたときに、わたしたちはその言葉の影響力を初めて知るわけなんです。

日本の歴史の中で、「言葉」、「キリスト教」ということで思い浮かべる一つの

エピソードがあります。1547年。1549年が日本のカトリックにとって大事なザビエルの来日ですね。その2年前に、フランシスコ・ザビエルはマラッカでアンジロウという日本人に出会います。これが日本への宣教のきっかけとなるわけですが、ザビエルは日本に関心を持って、アンジロウにこう聞きます。「わたしがもし日本に行くとしたら、日本人は信者になるだろうか」。アンジロウはこう答えます。「すぐに信者にはならないでしょう。まず初めにどれほどあなたに知識があるかを観察し、あなたの生活態度が話していることと一致しているかを見るでしょう」と答えたということなんです。その意味で、言行一致なのか、という部分が非常に日本人にとって昔から大事なことだったということなんです。

もう一つわたしが思い出すエピソードがあるのですけれども、これはかつて中学校の国語の教科書の載っていた、あるいは皆さんのおうちで朝日新聞をとっているかたは一面の「折々の歌」がかつて、今は「折々のことば」で西岡一正さんが書いていますけれども、その前は大岡信さんが詩を掲載していたわけなんですけれども、その大岡氏が別のところのエッセイでこういうエピソードを残しています。

彼が京都のある染織家を訪ねたときに、とても美しい桜色に染まった布を見たんです。「この色は何だろう。すごくきれいだなあ」と思って、「この色は何の色から取ったんですか」ということを、その染色家のかたに聞いたら、「桜からです」と答えたのです。それで、大岡さんは単純に、「なるほど、あの桜の花びらから桜色を取ったんだろうな」と思ったんですけれども、よくよく聞いてみると、この桜の色は、実は黒っぽい桜の皮から取り出した色だということです。しかも、桜の花が咲く直前の頃の皮から桜の色をとったんですよ、ということを知ったのです。そのとき、大岡氏は、言葉というものがなるほどそういうものだ、ということを書いているんです。「桜の木が、花びらだけでなく、木全体で一所懸命になって最上のピンクの色になろうとしている姿」を思い浮かべて、言葉も同じようなものだ、「一語一語はささやかな桜の花びら一枚一枚であり、表面は別の色をしていてささやかなものだが、背後にそれを生み出している大きな幹のような人間全体があるのだ」ということ書いています。改めて、わたしたち一人ひとりの言葉、発する言葉はわたしたちの奥にある人格に基づいた言葉なのかということ、そういったことを振り返り反省していく必要があると思います。

言葉は、こういった人間全体、人格から現れるものだと捉えると、本当に良い言葉というものを発するためには、やはり単純に言うと良い人間でなければならないし、いわゆる口汚い言葉、悪い言葉を発する人の心の中には何か良からぬ

ものがあるということが、そういうふうを考えられるわけです。

今日、あらためてこの言葉というものを振り返るにあたって、大事な意味合いが、キリスト教の中にあるということを理解していきたいです。それは本当の意味で言葉と行いがぴったり合致した方がいらっしゃるということです。これはすぐお分かりになる通り、イエス様ですね。今日の福音の中でこういうふうに多くの人たちが驚くわけです。イエスは教え始められます。「人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである」と書かれています。イエスの言葉には力がある、イエスの教えには力があるということ。「律法はこんなものだ」と言うだけ言って、律法と自分の行動が一致しない律法学者のようにではなくて、本当に権威ある者として、言葉と行いが一致した者としての言葉を発するイエスに多く的人是は驚くわけです。

ここであらためて、わたしたちはあのヨハネの言葉も思い出します。「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。言は世にあった」（ヨハネ 1・1-4、10）。この「言（ことば）」という言葉、ギリシア語で「ロゴス」と言いますが、神の思い、神の意思、神のみ旨というふうに置き換えることができます。この言そのものが世界を創り、言は最初から神と共にあったということ、そしてこれは三位一体論の中に考えられていくと、この言は誰なのかということになっていくわけですね。ヨハネの第1章のこの部分、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（ヨハネ 1・14）。つまり、この言は人間となって、肉をまとしてわたしたちの間に来たんだというのが、このヨハネの神学の大事な部分ですね。これを、わたしたちはお告げの祈りのときに「みことばは人となり、わたしたちの間にお住みになった」というこの言葉を大事にしています。

あらためて、わたしたちにとって最高の言葉と行いが一致した方はイエス様であるということ、言葉は本当にそのままわたしたちの間に宿られたということをもっともっと深く味わっていただきたいと思います。

聖書の中で、神様の言葉というのは単に虚しいものではないんですね。わたしたちは時々嘘をついたり、真逆なことを言ったり、あるいは世間話で無駄な時間を費やしたりしますが、聖書の中で、神様の言葉は必ず実現するものとして描かれています。これが聖書の思想であり、聖書の信仰であります。神は「光あれ」と言います。光がその時「なる」んですね。これは創世記の第1章で繰り返されます。神は「何々あれ」。「そうになった。神はそれを見て良しとされた」と

いう言葉が繰り返されるわけです。神の言葉は必ず実現するということ。

あらためて、神の言葉がそのまま人間となってわたしたちの間に宿った、その言葉が実現した方であるということをしっかりと思い出していきたいと思いますし、わたしたち自身がキリストを信じるということはどういうことか、わたしたちが本当にイエスにならう者として、わたしたち自身の奥にある内面というものが、本当に自分の行動とか振る舞いとか、そして発する言葉に表れるものであることを、イエス様にならうようにしていきたいと思います。

もう一つ、今日、変わった観点でお話ししたいと思います。今日の福音の中にある悪の駆逐、悪の追放の部分なのです。あらためて、わたしたちにとって、悪の問題というものをやはりもう一度ちゃんと見直す必要があるのではないかなということをし少し促してみたいと思います。わたしたちはミサの交わりの儀のところで、まず主の祈りを唱えますね。主の祈りの最後のところ「わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください」と、最後の最後に「悪からお救いください」と祈ります。イエスが主の祈りを教えたのは、マタイ福音書の山上の説教ですけれども、あそこの悪は実は聖書の中では抽象的なものではないのです。彼は「悪い者から救ってください」（マタイ 6・13）という言い方をして教えています。つまり、悪というのは単なるフワフワした抽象的なものではなくて、人格的な何かを持った存在として描かれているということ。

ちょっとマニアックな話になりますけれども、今存在と言ってしまいましたが、キリスト教において悪は存在じゃないんです。非存在です。これはちょっと理屈なんですけれども、本当に存在される方は神様であって、存在の欠如、非存在である悪というのがキリスト教の神学なのです。つまり、キリスト教においては、善神と悪神が存在するという二元論的な構造ではなくて、本当に存在される方、本当の善の方、本当の愛の方は、ただお一人であるということ。それに対して悪はそういったものが欠如しているという意味での非存在であると捉えられる。

こういう理屈は置いておいて、わたしたちの中における悪の問題はやはり意識しつつ考えていく必要があると思います。特に現代社会におけるさまざまな国家間の紛争、社会の墮落、あるいは人間の中にあるエゴイズム、そしてわたしたちもどこか影響されている利己的になっていく生き方、排他的になっていく生き方、不寛容、悪い意味での短絡的な考え方、そういったことに何となく流されていって、いつの間にか悪に流されてしまっている部分がないかどうか。その中でイエスが告げたのは何かと言えば、「神の国は近づいた」（マルコ 1・15）ということなんですね。神の国の近づきは悪霊の駆逐と同時なのです。わたしたちはキリスト者として「悪霊

を、悪の働きを退けます」ということ、「イエスによって退けます」ということをあらためて今日確認していきたいと思います。

悪に関して、今日の福音に悪のテーマがあると知って、2009年にわたしが特集した「カトリック生活」の「悪を考える」という特集を引っ張り出して見つめたら、なんと、聖ヴィアンネのエピソードがあったんです。アルスの聖なる司祭、ここはビアンネ教会ですから、少し紹介したいと思います。聖ヴィアンネも結構悪魔から意地悪されるんですね。悪魔に何をされたか、ちょっと面白いエピソードがあります。

「ヴィアンネが神父になってから、初めの頃は、眠ろうとすると、ベッドのカーテンがビリビリ裂かれる音がした。ネズミのいたずらかと思ったが、翌朝その痕跡はなく、不思議な現象は激しくなるばかり。

「盗賊かと思い、屈強な若者を司祭館に泊ませたが、何者かが戸を乱打した後、地響きがして、地震のように司祭館が揺れたので、若者たちは震えあがって逃げてしまった。その後も、熊のように吠えたり、庭でけんかや議論をしたり、騎兵隊のようなひづめの音を立てたり、テーブルやストーブをたたいて騒いだり、不気味な枯れた声で歌ったり、「ヴィアンネー、ジャガイモ喰らいのヴィアンネー、おまえはまだ死なないのか、今におまえをつかまえるぞ!」と脅したり。

「あまり動じていなかったヴィアンネだが、ある夜、固いはずの寝床が急に柔らかくなり、体が羽根布団の中に落ち込むようにうずもると、肉体的に誘惑する声が出た。このときはさすがに困って、十字を切ると、終わったという」。

そういった面白おかしい部分もあるんですけども、ヴィアンネの体験談がわりと残っているわけです。

ちょっとここで確認したいんです。わたしは「悪魔がいて、なんとかなんとか」という話で恐怖心をあおったりはしたくないんですけども、ただわたしたちにとって、こういう言葉をちょっと心に留めておきたいと思います。アングリカン・チャーチの作家・神学者でもあったC.S.ルイスの言葉です。

「悪魔について、悪について人間が考えようとするときに陥りやすい誤りが二つありますよ」ということ。「どちらも正反対の態度なんだが、どちらも間違っていますよ」と彼は書いています。「一つは、悪魔の存在、悪の存在を全く信じない態度、もう一つは、それを信じるだけでなく、過度の不健全な関心を寄せるという態度であるということ。悪魔自身は人間の側のこの二つの誤りを喜んでいて、前者の態度をとる唯物論者をも、後者の不健全な関心を持つ魔法使いをも、等しく歓迎している」ということです。

あらためて、今日のイエスの悪の駆逐のストーリーを読みながら、話を聞きなが

ら、わたしたちはただやはり「悪魔なんかいないよ」という態度、あるいは「悪魔、悪魔」とビビりまくって変な関心を持つということ、両極端にいかないようにしていきたいと思います。

あらためて、「神の国は近づいた」、それは、神様が、イエスが来て、イエスの言葉によって悪霊が駆逐された、そこに希望を置きつつ、わたしたち自身が常に日頃から悪の誘惑に対して、わたしたちはイエスによってそれに打ち勝つということを出していききたいと思います。

ベネディクト16世が、教理聖省の長官時代にこういう言葉を残しておりますので、これで締めくくりたいと思います。

「キリスト教信仰にとって、悪魔はある神秘的な存在ではあるが、リアルでパーソナルな存在であって、象徴的存在ではない。悪魔は力ある実在であり、歴史をリアルに読み取ればそこに見せつけられるように、常に新たにされ、ただ人をもってしては説明できない極悪非道の底知れぬ深みをもって、神の自由に対立する超人的な悪意のある自由である。人は一人でサタンに立ち向かうことはできないが、サタンは唯一の神に対立する別の神ではないのだから、わたしたちはキリストと一致して、確実にこれに勝てる。わたしたちを救う力と意思を持っているお方は、近くにいます神、キリストである。だからこそ、福音は真に良い便りなのである」。

今日は、マルコ福音書が読まれました。マルコ福音書の冒頭は、「神の子イエス・キリストの福音の初め」（マルコ1・1）です。その良い知らせの初めは「神の国は近づいた」であり、その実現として今日の福音で展開された最初の奇跡が悪の駆逐なのです。ここに神様の国が始まっているということなのですね。あらためて、わたしたちは神様の国に属するものとして、神様の国の建設に協力するものとして、本当に神様の、イエスの言葉を信じて、イエスの言葉を聞いて、イエスの言葉を信じて、悪に立ち向かう力を頂きたいと思います。